

～特集～

# 平川市を 継承する人たち

現在、平川市では、人口減少や少子高齢化の問題を抱えています。市の基幹産業である農業については、水稲やりんご農家の数が年々減少しており、担い手不足の状況が続いています。尾上地域の庭園文化を継承する庭師についても、後継者不足に悩まされています。郷土芸能「獅子踊」では、後継者不足により団体数が減り、市民が地域の伝統に触れる機会が少なくなっています。また、県内屈指の温泉のまちである当市の温泉施設についても減少傾向にあり、長期的にみると地域の温泉文化の存続が危ぶまれている状況です。冬季には一人で雪を片付けることが難しい高齢者を対象に地域でのボランティア除雪も必要となっています。

今回は、このような状況下においても、産業や郷土芸能、文化や地域を守る活動について、それぞれの分野で継承しようと活動する皆さんをご紹介します。





# りんご農家

株式会社那由多のりんご園

なゆた  
三浦 那由多 さん  
(27歳・沖館)



## 那由多のりんご園

柏木農業高校(環境工学科)を卒業し、尾崎りんごセンター(弘前市)で1年間修行した後、りんご農家として働いて10年以上という三浦さん。りんご栽培は祖父の代から始まっているといいます。「平成28年に那由多のりんご園を設立し、現在は、父と祖父と祖母の4人にスタッフ数人で運営しています。私の『那由多』という名前は数字の単位で、きわめて大きな数量を表しており、父親がりんご園を設立した時に名称に入れました」

## ずっと身近にあったりんご

「実家がりんご農家だったので、小さい頃からりんごが身近にあり、りんごを食べることが大好きでした。小学校高学年くらいから、葉取りや反射シート敷きなどの簡単な作業は手伝うようになりまし。高校時代には収穫シーズンになるとりんごもぎの作業を本格的に手伝っていました。高校も農業専門校を選んだということもあり、どこか祖父の代から続くこのりんご農家の後を継ぐことを考えていたんだと思います」と三浦さんは話します。

## りんご作りのこだわり

お客様に満足してもらえるよう、品質の良いりんご作りを意識しているという三浦さん。「化学肥料や除草剤は不使用、有機肥料100%で生産しています。りんご1つ1つを糖度センサーに通し、基準をクリアした果実のみを出荷しています。贈答用の場合はりんご1個ずつ(贈答用でない場合は1箱に1個)に糖度を表示した紙を付けて、甘さを目で見えるようにしています。りんごの4面の糖度を測定して糖度を出す作業なので手間がかかるのですが、甘さが十分であることを保証できるうえ、それぞれのりんごを食べ比べるなどして楽しんでもらいたいという思いがあります」と話します。



## 自分のように農業を

まずは売上と顧客の獲得に力を入れていきたいという三浦さん。「青森県のりんごと言えばうちのりんご、と言ってももらえるよう、日々精進したい」と希望を語ります。「年齢や健康を理由にりんご栽培をやめる人も少なくない中で、自分のように農業を選択する人が増えていけば、さらにりんご産業が盛り上がりつつあると思います」と話しました。





# 水稻農家

水稻農家

工藤 憲児 さん

(45歳・西野曾江)



## 幅広い分野で学んだ20代

地元の高校を卒業した後、青森県営農高等学校で花きを専攻し、その後はカメラレンズ会社、りんご卸売会社、製造業など様々な仕事を経験した工藤さん。「若い頃は農業にはこだわらなかつたけれど、小さい頃から『最終的には農家をやる』という漠然とした思いがありました。私が小学生の頃は、畑やりんごもあつたので、りんご収穫などの手伝いをしつつ遊んでいました。両親は農家を継ぐことについては『やりたいならやれば良い』というスタンスだったので、気負うことなく自由に会社を転々としていました」と工藤さんは笑います。

## 漠然とした志がついに

30歳になった時、工藤さんを心配した父親から、今後についてどうするかを聞かれたといいます。「農業は作業自体は1年で覚えられるけれど、気温などの天候は毎年異なるため、臨機応変に対応する必要があつて。覚えることが多くて積み重ねが物を言うので、できるだけ若いうちから始めたいという思いがありました」工藤さんは農業を始めることを決意します。

## ▼農薬散布をする工藤さんたち



## 現状に合わせた米作り

農業を始めると、毎日米作りの仕事を覚えるのに必死だったといいます。工藤さんは現在、就農して17年目となり、父親と共に営農しています。栽培方法は全て、ハウスで育てた苗を田植え機で植える「移植栽培」。工藤さんは、「大規模に経営する農家では、今は田に直接種をまくなど省力化の方法が一般的になりつつあるけれど、移植栽培と比べると味は劣ります。ハウスの中で手をかけて苗を育てることで、雨風に強い苗になる。収穫までの生育が安定して美味しいお米ができるんです。」と教えてくれます。「ただ、近年栽培を難しくしているのが温暖化。昨年は水温が高くなりすぎて高温障害（米粒が白濁化する現象）が発生しました。このような異常事態にどう対応するかを考えた米作りをしなければなりません」

## 美味しいお米を作り続けたい

「刈り取りして数日後にすぐ新米を食べることができるのは農家の醍醐味です。炊飯器をパカッと開けた時、うまかった年は本当に甘い香りがするんです」と嬉しそうに話す工藤さん。

今後については、「新しいことをやるより確実なものを作ることを大事にしたいです。一つ一つの行程を丁寧に行うことで、質が良く、食べる人が美味しいと思うお米を作りたい。どうやって昔から続く基本の『移植栽培』を維持しながら面積を拡大できるかというのが今後の課題ですね」と将来のビジョンを教えてくださいました。



▲新米にご飯のお供をのせて



# 庭師

おもとえん  
万年青園株式会社

かずとし  
福士 和利 さん

(41歳・新屋町)



## 家業は造園業と左官業

高校卒業後、職業訓練校で造園を学び、造園技能士3級を取得した福士さん。平成19年には難関の造園技能士1級を取得して本格的に家業に本腰を入れたといます。「もともと福士家の家業は造園業と左官業があり、造園業は祖母が、左官業は父親が担っていました。高校までは父親の後を継ぐ予定でしたが、祖母の方が年齢が上なので先に引退しなければならぬ。造園業がなくなるのは嫌だ、と思って考えを改めました。その後、職業訓練校で造園を学んで面白さに目覚め、本格的に造園業を継ぐと決めました」

## 祖母の存在

「祖母は30代から造園をやっていました。最初は軽トラックに植木を積んで売り歩いていたようです」と福士さんは話します。万年青園の創設者である福士さんの祖母・和子さんは、現在は一線を退いているものの、大きな存在だといえます。和子さんは52歳の時、県内の女性で初めて難関の造園技能士1級を取得しました。その後、業界への貢献が認められ、県内女性造園師のパイオニアとして全国表彰された経歴

もあります。福士さんは、「祖母と仕事をしたのは6年間くらい。本当に仕事が速い人。喋りもうまくて知識も豊富。新しい家が建つとすぐ営業に行き、その場で庭園のイメージを提案し、仕事を決めてきました」と和子さんのすごさを語ります。

## 外に出て学ぶ

当初は仕事を着実にこなすことだけを考えていた福士さん。しかし、当時の尾上町の商工会青年部や日本造園組合連合会の青年部に入会すると、県内外の同業者と積極的に情報交換するようになったといえます。「22歳の時、山口県で行われた技能五輪の造園部門に青森県初の代表として出場し、10時間で庭を造る経験をしました。ほかにも富山県発祥の軽トラガーデンを本県でも普及させるべく活動し、仙台で行われた全国軽トラガーデンコンテストでは青森県代表として携わりました」福士さんは精力的に学び続けています。

## 自分の庭を作りたい

「造園業の楽しさは、自然に関わり、と全部を仕事にできること。今後も自分で造る庭を増やし、お客さんの要望に叶う様々なジャンルに対応できるように試行錯誤したいです」と福士さんは目を輝かせます。今後については、「現在造園業は父親と2人で担っていますが、綺麗な庭がある状態、仕事がある状態を維持し続けることで若い世代につなげていきたい」と話しました。

▼剪定作業をする福士さん







# 郷土芸能 獅子踊

尾崎獅子踊保存会

工藤<sup>きよあき</sup>聖彰さん

(33歳・尾崎)

## 敷居が高いと思っていた獅子踊

ねぶた囃子などの地域活動にも積極的に参加している工藤さん。その活動の中で、獅子踊を担う人たちから声を掛けてもらっていたといいます。「入る前、『獅子踊は神聖なもので、敷居が高い』と感じ、数か月ほど返事を保留にしていました。ある日、尾崎獅子踊保存会にお囃子で参加している父親から『獅子踊に興味はないか』と誘われたんです。当時、親子で一緒に獅子踊共演することは珍しかったので、面白いと思いました。父が言うならやってみよう」と踏み切りがつき入会しました」と工藤さんは話します。

## 授かった「中獅子」の役割

ねぶた囃子をやっているので囃子方かと予想していた工藤さんに授けられたのは獅子3体のうちの「中獅子」でした。「中獅子は、向かって右側の獅子。性格は勇猛でたくましく、演舞の中では一人踊りのシーンが多いんです。中獅子の歴代の親方（師匠）は小さい頃から獅子をやっている人が多いため、抜けて上手い人が多いので、自分に務まるのか不安でプレッシャーに押し潰されそうでした」と当時を振り返ります。

## 獅子踊の面白さ

厳しい練習をこなしながら、6年ほど経験を積んだ工藤さん。演舞する際は、かぶりものではなく獅子自体が踊っているように、どっしりと躍動感のある動きを意識しているといいます。「福祉施設などで獅子踊を披露する時は、獅子踊の意味やストーリーを紙芝居などで伝えることもあります。観客の皆さんと最後に記念撮影をしたり、直接触れ合ったりするのも、獅子踊を身近に感じてもらっていると実感します。見ている人に獅子踊のストーリーを聞かれた時、『これは獅子3匹が山に入るために周囲を偵察する場面、次は危険なものはないので実際に山に入る場面です』などと伝えたところ『どういう場面の踊りなのかかわかって面白』と喜んでくれました」

## 後世に繋ぎたい郷土芸能

今後の演舞の目標は、「踊り手とお囃子とが一体となって演じられるようになること。そして、伝統の尾崎の踊りを崩さずに後世につなげる」と話す工藤さん。

「獅子踊のストーリーがわかると見方も変わるので、もっと多くの人

に獅子の面白さを広めたいと思います。尾崎の獅子を踊ることは自分の誇りなので、授かった基本の『尾崎の獅子踊』は崩さずに、情景や心情など自分独自の捉え方をふまえた魅せ方ができ、見ている人たちにも伝われば良いなと思っています」と笑顔で話しました。

▼地域の墓で舞を披露する尾崎獅子踊保存会

※9月1日(日)に行われた「墓踊り」の詳細や動画はこちらです。





# 温泉

ふるとおべ  
古遠部温泉代表

長井 めぐみ さん

(63歳・碓ヶ関)



## うわさの古遠部温泉

宮城県仙台市出身の長井さん。青森好きが高じ、青森市に住んで仕事をしながら、温泉を楽しんでいました。「青森市には13年間住んでいました。令和2年に拠点を仙台に戻すことになったタイミングで古遠部温泉を知ったんです。平川市の碓ヶ関という地域に良い温泉がある、と。実際に行ってみると自然に囲まれた温泉で、とても気持ちよく、秘められたパワーを感じました。もっと早く知っていたら、と思いましたがね。その後も県外の友達を連れて来ると足繫ぐ通うようになりました」

## 感動的な実体験

古遠部温泉の良さを実感した長井さんは、ある日、糖尿病を患った叔母を温泉に連れて行きました。「重度の糖尿病で合併症もあり、歩行器を使い、手も震えるので食事はスプーンで食べるような状態でした。私の妹と一緒に介助しながら温泉に入れて、一泊し、翌日の朝食の時のこと。なんと叔母が普通に箸を持ったんです。そしてその日叔母は歩行器にはほとんど頼らずに帰りました。この光景を目の当たりにし、この温泉のすごさを感じたんです」

## 日常的なやり取り

「宿泊予約をするために電話した時、女将さんに5月でやめることを聞いて驚きました。ただ、女将さんたちとの日常的な会話の中で、冗談交じりに『維持するのが大変だからいつでもやめるよ』とは聞いていて。私も『もしそうなら何かお手伝いできるかも』と笑いながら話していました」

自分が古遠部温泉に入れなくなるのが一番嫌だったという長井さん。継承者募集のニュースを見て、名乗りを上げたといいます。「温泉ごと、お客さんごと引き継いでほしい」という社長の思いを受け、継承の意思を伝えたいといいます。「社長から『是非譲りたい』とその場で許可をいただき、この温泉をしっかりと引き継ぐと心に決めました」

## ▼古遠部温泉内観



## 今後のビジョン

「この地域はお年寄りの方が多くので、デイサービスの送迎サービスを展開し、入りに来てもらうことができるようにしたい。もちろん今元気な若い人たちにも体感してほしい。そして交通がもっと便利になるように、古遠部温泉の直行バスを作ることも将来的には考えたいです。碓ヶ関地域の活性化にも貢献していきたいと思っています」と長井さんは笑顔で話しました。

## ▼湯上がりのお客さんと話をする長井さん





# 地域除雪

平川市社会福祉協議会

木村 <sup>けいすけ</sup> 圭佑 さん  
(36歳・高畑)

## 職業体験を経て福祉の道へ

平川市社会福祉協議会の職員であり、向陽地区の住民としてボランティア除雪の出動隊の役割も担っている木村さん。「元々向陽の出身で、弘前学院大学在学中に職業体験で平川市の社会福祉協議会を訪れ、福祉の仕事に面白さを見出しました。どこで働くかと考えたときに、他の場所である意味はない、地元で貢献したいという思いから入社を決意しました」と話します。

## 地元根付いた生活の中で

「数年前、認知症の高齢者が徘徊していると連絡があり、消防団員や地域の人たちと1時間以上探し回ったことがあるんです。その方は幸いにして発見できましたが、地元柄、雨宿りスポーツや死角になる場所や、仕事柄も徘徊場所などの知識があるにも関わらず、地域の生活に還元できていないのではと思いました」と木村さんは話します。「その頃からより一層地域での活動に関わり、除雪にも携わるようになりました。日中は勤務なので、除雪はメインではなくても自分の持つ情報を提供して役立てることはできるのでは、と思ったのです」

## 職業をいかしてできること

木村さんの家では、父親が民生委員でもあるため、家族で近所の人たちの話になることも多いといいます。

除雪ボランティアは、ひとり暮らし高齢者、高齢者夫婦世帯や障がい者世帯を対象に、道路除排雪後の雪の除去や生活路の確保のため行われます。平川市社会福祉協議会では除雪ボランティアを配置した町会等に助成金を交付し、地域の安全を守っています。

「向陽町会では全エリアを3か所に分け、雪が降るとトラクターを持つ各エリア担当者を含め3

人くらいが稼働する仕組みです。除雪は当日の朝に行くことができる人を中心に出動します。私はおおかた指南役として、なかなか目が行き届かない世帯や機械では入ることのできない場所などへ誘導します。可能な限り地域の人に声をかけつつ、いつでも出動できるように準備しています」

## 除雪活動と地元愛を広めたい

「地域の活動は除雪だけに限らず、様々な世代の方が困っている人のことを『自分事』として考え、気軽に隣の人の雪を片付けられるような関係性になればいいですね。」という木村さん。

地域の活動については、「私たちのように若い世代がまず入っていくことが大事だと思うので、自分がまずそれぞれの活動で仲間を作って誘っていったら。最終的には、地元を好きと思える人を増やしたいんです」そう話す木村さんの目には希望が感じられました。



▼朝のボランティア除雪の様子



「～特集～平川市を継承する人たち」について、まちづくり専門の先生や今後の平川市を担う平川市ユース議会の方にコメントをいただきました。

きたはら けいじ  
北原 啓司 先生

弘前大学 特任教授



まちづくりや建築意匠が専門。様々な自治体の都市計画や景観等に関する委員を務めるなど、県内外のまちづくりに貢献している。

## 地域のプライドを 未来に確実につなげる 平川の元気な人々

様々な分野の平川市の皆さんの言葉から、感じたことがあります。那由多のりんご園の三浦さん、「どこか祖父の代から続くこのりんご農家の後を継ぐことを考えていた」。りんごを食べるのが大好きだった少年が、つくり手を目指した時。水稻農家の工藤さん、「30歳になった時、心配した父親から今後についてどうするかを聞かれた」。父親と向き合った息子が腹を括った時。万年青園の福士さん、「祖母と仕事をしたのは6年間くらい。本当に仕事が速い

人」。祖母の仕事を眩しく見てきた孫が目覚めた時。尾崎獅子踊保存会の工藤さん、「保存会にお囃子で参加している父親から『獅子踊に興味はないか』と誘われた」。父親の活動をずっと見てきた息子が動いた時。古遠部温泉代表の長井さん、「もしそうなら何がお手伝いできるかも」と笑いながら話していました。自分が古遠部温泉に入れなくなるのが一番嫌だった彼女が、人生の転機を選択した時。社会福祉協議会の木村さん、「仕事柄も徘徊場所などの知識があるにも関わらず、地域の生活に還元できていないのでは」。本当に地域に貢献できることを、自分なりに見つけた時。

いつも見てきた大切な家族、大事な場所への想い。それらが、大事な転機に皆さんの背中を押してくれています。それこそが地域力、もつと丁寧に言えば、平賀、尾上、碓ヶ関それぞれのシビツクプライド※1などだと思います。それは古遠部温泉の長井さんのように、平川在住ではない人を「関係人口※2」として惹きつけてくれています。平川で生まれ育っても、本当の関係人口ではない人々が、実はたくさんいる気がします。本当の意味で平川の関係人口になった6人の未来に、心からエールを送ります。

※1 市に対する市民の誇りを表す言葉。

※2 移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域と多様に関わる人々を指す言葉。（総務省 HP より）

平川市ユース議会  
かさい あやみ  
メンバー 葛西 彩水 さん  
(25歳・日沼)



## 「平川市が好き」という 思いから地元のために できることを

平川市で活動している人たちの根底には、「平川市が好き」という地元愛がありました。私も平川市が好きで、地元のためにできることは何かを考え、ユース議会※1に参加しています。

市内外において、担い手不足は深刻化しています。高校や大学を終えると県外へ行ってしまいう人が大半です。SNSで自分が置かれている環境と同年代の人たちの生活状況を比べてしまい、より良い生活環境を求めて都会に憧れ、地元を出てしまいます。

そのような県外流出の課題の打開策を見つかるべく、今後も平川市の魅力を多くの方に知ってもらえるよう、ユース議会でも様々な企画を考えていきたいと思っています。

※1 若者が地域の課題を話し合い、ワークショップや視察研修を行って意見を出し合うことによりまちづくり事業を提案する活動。

## ～特集後記～

今回、平川市で活動している様々な分野の方に取材させていただき、それぞれのルーツや思いを知ることができました。今回取材した方々のように、市内で希望をもって活動している人は他にもいると思います。そのような「人々の活力」も平川市の魅力の一つだと感じました。今後も平川市が活気にあふれ、皆さんに愛されるまちとして継続できるよう力を尽くしたいです。